

15 スクリーニングで発見された食道小細胞癌の1例

佐々木正貴・池田 義之・大竹 雅広
須田 武保・柴崎 浩一*・中島 孝司**
味岡 洋一***

日本歯科大学新潟歯学部外科
同 内科*
新潟中央病院内科**
新潟大学大学院分子病態病理***

症例は72歳男性。スクリーニング目的の上部消化管内視鏡で胸部下部食道に軽度の扁平隆起を認め、生検で小細胞癌（内分泌細胞癌）と診断された。術前精査でリンパ節および他臓器転移は認めなかった。手術は経裂孔食道切除術を行った。切除標本では10×5mm大の0-I sep腫瘍を認めた。病理診断は内分泌細胞癌，sm3，n（-）で病理組織学的進行度はp Stage Iであった。免疫組織化学的検査ではNCAMが陽性だった。術後High dose FP療法を3コース行い、術後6ヶ月の現在再発を認めていない。

16 臨床病理学的検討からみた中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清の考え方

藍澤喜久雄・佐野 文・森岡 伸浩
清永 英利・宮下 薫

燕労災病院外科

【目的】臨床病理学的検討からみた中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清範囲を考察する。

【方法】切除胃癌1087例中の中部胃癌317例（29.2%）と下部胃癌506例（46.5%）の823例（75.7%）を検討対象とした。

【結果】リンパ節転移陽性率は、中部胃癌；29.7%，下部胃癌；42.3%であった。また、進行癌で73.4%，下部胃癌の未分化型癌で65.8%と高率であった。部位別リンパ節転移陽性率は、中部胃癌では第1群のNo. 3, 4d, 1，第2群のNo. 7, 8a，下部胃癌では第1群のNo. 6, 3, 4d, 5，第2群のNo. 8a, 7, 9が高かった。No. 11pの転移率は3.6%であった。

【結語】中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清

は、D2郭清の範囲で行う。進行癌，とくに下部の未分化型癌のリンパ節転移陽性率は高く，これらに対しては，第2群のリンパ節郭清を精度よく行い，郭清範囲の拡大も考慮すべきである。

17 切除不能進行胃癌に対する術前化学療法としてのTS-1+CDDP療法

大橋 学・神田 達夫・坂本 薫
矢島 和人・田邊 匡・小杉 伸一
畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】切除不能進行胃癌に対する術前化学療法（NAC）としてのTS-1+CDDP療法の治療成績を検討する。

【対象と方法】2002年1月から2005年4月までの間に，治癒切除不能胃癌と診断された31名を登録した。対象患者にはTS-1+CDDP療法を行い，治癒切除可能となれば腹腔鏡検査で播種がないことを確認後手術を施行した。手術施行割合と生存期間について検討した。

【結果】31名中7名（23%）が切除可能と診断された。しかし，実際治癒切除を施行された患者は4名（13%）であった。全患者のMSTは341日，1年生存率は39%であったが，治癒切除患者においてはMSTには達せず，1年生存率100%であった。

【結論】切除不能胃癌に対するNACとしてのTS-1+CDDP療法で治癒切除が可能になる患者は10%程度に過ぎない。しかし，治癒切除が可能であった患者の予後は期待が持てる成績である。

18 大腸癌術後肺転移に対して抗癌剤の時間治療は有効である

宗岡 克樹・白井 良夫*・若井 俊文*
横山 直行*・畠山 勝義*

新津医療センター病院外科
新潟大学大学院消化器・一般外科*

【目的】抗癌剤を至適投与時間に投与する時間

治療 (chronotherapy) は、副作用を軽減することで投与量を増加させ、その結果抗腫瘍効果の増強が期待できる治療法である。本研究の目的は、抗癌剤の時間治療が大腸癌肺転移に対し有効か否かを検討することである。

【方法】対象は大腸癌術後に切除不能な肺転移巣が出現した12症例であった。男性6例、女性6例であり、年齢は40才～85才(中央値69才)であった。原発は結腸7例、直腸5例であり、時間治療としてPMC療法(週1回5-FU 600mg/m²を9時から24時間かけて静注し、UFT 400mg/day週5～7日間経口投与を併用)を外来で施行した。PDの場合には5-FUの投与量を段階的に1500mg/m²/24hまで増量した。CPT-11+CDDPは17時から19時に外来で点滴静注した。治療期間は3～38か月(中央値14か月)であった。

【結果】PRは7例、SDは4例、PDは1例であった。Grade3以上の副作用はなかった。

【結論】抗癌剤の時間治療は大腸癌肺転移に対し有効である。時間治療は、副作用の発現を低下させ抗腫瘍効果を高めることにより、安全な外来化学療法を長期間可能にする。

19 大腸癌局所再発に対する外科的切除例の検討

高橋 元子・河内 保之・丸山 智宏

小野寺真一・原 義明・平野謙一郎

西村 淳・新国 恵也・清水 武昭

新潟県厚生連長岡中央総合病院外科

【目的】大腸癌局所再発例に対する外科的切除の意義を検討した。

【対象】過去4年間に外科的切除を行った大腸癌局所再発6例(8回)。

【結果】初回手術から局所再発手術までの期間は2年4ヶ月から5年9ヶ月。初回手術の局在は直腸4例、上行結腸1例、横行結腸1例。初回手術後補助化学療法は3例に施行。再発に対する手術術式は、再発腫瘍のみの切除2回、腸管切除1回、周囲臓器合併切除5回。手術時間は50分から395分、出血量は20mlから2220ml、術後合併症

は骨盤死腔膿瘍1例。無再発生存中は2例(1年7ヶ月、4年3ヶ月)、再発生存中は2例でいずれも大動脈周囲リンパ節再発で化学療法施行中。原病死は2例で局所および遠隔再発し、いずれも再発手術時に組織学的に癌が遺残した症例。

【まとめ】大腸癌局所再発に対する外科的切除は周囲臓器の合併切除となることが多いが、完全切除が行われれば予後は期待できる。

20 乳癌術前化学療法に対する不応症例の検討

高橋 聡・佐野 宗明・佐藤 信昭

金子 耕司・中川 悟・瀧井 康公

藪崎 裕・土屋 嘉昭・梨本 篤

田中 乙雄・本間 慶一*

県立がんセンター新潟病院外科
同 病理部*

【背景】乳癌の術前化学療法(NAC)の目的の一つに抗癌剤の生体内感受性試験があり、NACに対する反応性は予後因子として重要である。

【目的】NAC不応例の臨床病理学的特徴を明らかにする。

【対象】当科にてNACを施行された142症例中PDであった12症例。

【結果】不応例には50歳未満、閉経前、T4b、充実腺管癌、nuclear grade 2 or 3, ER(-), PgR(-), Her2(-)の特徴があった。術後早期再発死亡症例はtaxane, anthracycline両者に不応、2年以上無再発生存している症例はtaxaneに不応、anthracyclineが有効だった。

【まとめ】NAC不応で術後早期再発死亡症例は50歳未満、閉経前、T4b、充実腺管癌、high nuclear grade, ER(-), PgR(-), Her2(-), taxane, anthracyclineの両者に不応、という臨床病理学的特徴を有す。

21 水原郷病院における麻薬製剤の使用状況

栗原 敬子・儀藤 幸子・宇野 勝次

水原郷病院薬剤科

現在、癌患者の標準的な疼痛治療法として